

英語複合母音核音⁽¹⁾の解釈と表記の問題点

高 嶋 稔

サピア、ブルームフィールドによって開拓されたアメリカ構造言語学において、比較的良好に研究されているのは音素論の分野である、と言われている。しかし、その音素論ですら学者によって説は種々あり、問題点も多い。たとえば、英語母音の音韻組織の表記法を比較すると、多くの相違がみられる。扱うデータの相違もあるが、特に異論がはなはだしいのは、いわゆる長母音、二重母音についての解釈と表記法である。これら長母音、二重母音の解釈と表記法が異なる理由として、グリーンソンはつぎの五つをあげている。

- (1) Differences in SYMBOLS.
- (2) Differences in the MATERIAL TREATED.
- (3) Differences in INTERPRETATION OF THE DATA.
- (4) Differences in the CONCEPT OF THE PHONEME.
- (5) Differences in the STATE OF LINGUISTIC RESEARCH.⁽²⁾

このほかに、教育的考慮の介入などが考えられるが、小論では、この長母音、二重母音について、各説の中で代表的と思われる学者の解釈と表記法の一つ一つを比較して、その問題点や長短を考察し、どの説が最良であるかを検討する。

音節核音のうち、いわゆる長母音、二重母音に対する解釈を大きく分ける

-
- (1) Complex vocalic nucleus. 英語のいわゆる長母音、二重母音を複合単位と認めるか、単一の単位とするかは、学者によって解釈が異なる。筆者には複合と考えられるので、この用語を最初から使用した。筆者が長母音、二重母音を複合単位とする理由については後述の 2. 1. 及び 2. 2.
 - (2) H. A. Gleason, *An Introduction to Descriptive Linguistics*. Rev. ed. 1961. p. 313.

と、これらの核音を複合として認めるか、単一とするか、あるいは、ある核音を複合とし、他の核音を単一とするか、の三つになる。複合とするのは、⁽¹⁾トレガー・スミス、⁽²⁾ホケット、⁽³⁾ジョーンズなどであり、⁽⁴⁾ケニヨン、⁽⁵⁾パイプ、⁽⁶⁾フリーズは、bait, boat, boot, beat などの核音のみを単一とし、bite, bout, boy などの核音を複合とする。⁽⁷⁾中島、⁽⁸⁾太田、⁽⁹⁾林の各氏は複合と解釈している。

つぎの表は key word をそえた、一般に長母音、二重母音といわれている音節核音の表記の対照表である。ただし、アメリカ英語とイギリス英語で、可能な限り、音声的に違いの少ない key word を選んだ。その理由は、アメリカ英語とイギリス英語に共通な音声的データを、各学者がどのように解釈し、表記しているかに筆者の関心があり、小論の目的もそこにあるからである。

	key word	Trager-Smith	Jones	Kenyon	Pike	太田
1	beat	iy	i:	i	i	iy
2	bait	ey	ei	e	e	ey
3	palm	ah	ɑ:	ɑ	a	a
4	caught	ɔh	ɔ:	ɔ	ɔ	ɔ
5	boat	ow	ou	o	o	ɔw
6	boot	uw	u:	u	u	uw
7	bite	ay	ai	aɪ	a ⁱ	ay
8	bout	aw	au	au	a ^u	aw
9	boil	ɔy	ɔi	ɔɪ	oi ⁱ	ɔy

(1) G. L. Trager and H. L. Smith, *An Outline of English Structure*. 1951.

(2) C. F. Hockett, *A Manual of Phonology*. 1958.

(3) D. Jones, *The Phoneme: Its Nature and Use*. 2nd ed. 1962.

ジョーンズを複合とみるものの中に入れる理由は 1. 2. 1.

(4) J. S. Kenyon, *American Pronunciation*. 10th ed. 1950.

(5) K. L. Pike, *Phonemics*. 1947.

(6) C. C. Fries, *English Pronunciation*. 1954.

(7) 中島文雄, 英米音の音素表記, 「英語青年」Vol. CIX-No. 10.

(8) 太田 朗, 「米語音素論」1959.

(9) 林 栄一, 英米音の音素表記, 「英語青年」Vol. CIX-No. 12.

以下、前記の表記を中心に、長母音、二重母音に分けて⁽¹⁾、比較、検討する。

1. 長 母 音

1. 1. 0. いわゆる長母音を検討する前に、母音の長さについて考察する必要があるが、英語の母音の長さは、音素論的に重要性を持っていないことについて、ラドーはつぎのように述べている。

In most situations, English /i/ is longer than /ɪ/, although this difference in length can be proved not to be a phonemic feature. The proof is very simple. One can speak the word *beat* quite short and the word *bit* quite long, and they will still remain two distinct words for English speakers.⁽²⁾

これに対する母音の長さについての考え方として、よくジョーンズの説が問題にされるが、ジョーンズは、必ずしも、母音の長さのみが示差的特徴である、と考えているわけではなく、つぎのような予言をしている。

The tendency to lengthen "short" vowels appears to be on the increase. In the local dialect of London it is much more prevalent than in normal educated speech; it may also be observed in American English.

It is, in fact, possible that a new development of the language is beginning to take place, by which the present distinctions of quantity combined with quality will eventually give place to distinctions of quality only.⁽³⁾

つまり、母音の質と量で区別されているものが、結局、質だけの区別に代

(1) トレガー・スミスと太田氏は、いわゆる長母音を複合と解釈しているし、ケニヨン、パイク、フリーズは母音の長さを認めず、単一としているので、長母音、二重母音という分け方は、あてはまらないが、便宜上、伝統的な通念に従って分けた。

(2) R. Lado, *Linguistics Across Cultures*. 1957. p. 21.

(3) D. Jones, *An Outline of English Phonetics*. 9th ed. 1960. p. 236.

るであろうと述べているのである。

母音の長さを決定する要素は種々考えられるが、その主なものとしては、

1. 1. 1. 一般に同じコンテキスト (Context) の中では、口の開きが大
きい母音、たとえば、heart の母音は、口の開きが小さい母音、たとえば、
heat の母音より長い。

1. 1. 2. 隣接音の性質が母音の長さに関係がある。

トレガー・スミスは母音の長さについて、*seat seed seen cease sees see*
を例にあげて、これらの音節核音の長さを検討し、つぎのように述べてい
る。

We note first variation in length: *seat* has the shortest nucleus,
see the longest; *sees* has a nucleus almost as long as that of *see*,
while *seed* and *seen* are somewhat shorter; *cease* has a short nucleus,
but not as ⁽²⁾*seat*.

つまり、

(1) 末位にある母音、すなわち、ポーズがつぎにくる時は、いかなる子音
が後続する場合よりも長い。

(2) 有声子音の前では無声子音の前より長い。

(3) 無声摩擦音の前では無声破裂音の前より長い。

ジョーンズはこの言をうらづける具体的な実験測定結果を、つぎのように
表わしている。

seating 0.087 秒, *seat* 0.124 秒, *seen* 0.199 秒, *seed* 0.252 秒, *see*
0.317 秒。

(1) *heat* を /hiyt/ と解釈した場合、音節主音 (Syllabic) は /i/ だけであって、
/y/ は音節副音 (Nonsyllabic) であり、母音類で音節主音になるものだけを母音
とよぶとすれば、母音はこの場合 /i/ だけになってしまう。つまり、厳密には母
音としないで、音節核音とすべきであるが、ここでも、便宜上伝統的な母音、子
音という分類に従って、母音という用語を使用する。

(2) G. L. Trager and H. L. Smith, *op. cit.*, 1. 21.

(3) D. Jones, 1962. *op. cit.*, § 403.

この結果によると、seating が最も短い。つまり、

(4) 二音節語で強音節に弱音節が後続する場合は、強音節の音節核音は著しく短くなる。

結局、後続音の性質により、母音の長さに変化があることになるが、この音声的環境による母音の長さの相違は相補分布 (Complementary distribution) の関係にあり、そのために意味の変化をきたすことはなく、これらの母音の長さは音韻論的に意義がない。従って音素論の段階では、いちいち母音の長さを表示する必要はないわけである。

1. 1. 3. 単語が発話の中で使われている場合、イントネーションが影響して母音の長さを変える。

A I want to eat ↓

B I don't want to eat a bit ↓

上記二つの発話における eat の母音を比べてみると、Aのはイントネーションの中核 (Nucleus) として、最も強い強勢を受け、しかも、イントネーションの末尾曲線 (Terminal contour) 全体がこの一つの音節の中におかれるので、きわめて長いものになる。これに対して、Bのそれは、第一強勢を受けず、末尾曲線もそこになく、しかも、音節の数が比較的多い息の段落 (Breath-group) の一部分として発音されるので、非常に短いものになる。

1. 1. 4. 強勢の強弱により、同じ母音が長くなったり、短くなったりする。

notable notability notation

上記三語の第一音節の母音は強勢が強い程長くなる。

以上、母音の長さを決定する種々の要素を考察してきたが、結論として、母音の長さは、その音の環境によって決定されるものであり、しかも、母音の長さは非常に不安定なものである、ということが出来る。

1. 2. 0. トレガー・スミスとジョーンズ

まず、トレガー・スミスとジョーンズを最初に選んだのは、つぎの理由による。すなわち、トレガー・スミスの音韻論は、「アメリカ構造言語学が到達した水準を示す一つの epitome⁽¹⁾」であり、また、「アメリカ言語学界のひとつの流れの半ば公けの発言で、これまでの英語の音組織の記述の中で最も成功したものである⁽²⁾」のと、総合型 (Overall pattern) であるため、イギリス英語も含まれている。また、ジョーンズはイギリス英語のみを対象としてはいるが、イギリス英語は、いわゆるジョーンズ式で表記する習慣が確立しており、イギリスを代表するものと思われるからである。

両者の表記を一瞥して判明することは、共通点が全然ないことである。つまり、ジョーンズが長母音、二重母音と解釈している音節核音のすべてを、トレガー・スミスは /V+S/ (母音+半母音) としているのである。つぎに細部にわたって検討する。

1. 2. 1.

ジョーンズは彼の /i:/:/i/, /u:/:/u/ の対立で長さだけを考えていないことは前記 1. 1. 0. で述べたが、さらに、「長さの相違も質の相違も共に存在し、どちらが主か従か決しがたい。境界線的なケース (Borderline case) で、自分の話す南英方言では、長さの相違がわずかながら優位に立つようだし、伝統的には長さで区別するから、伝統に従うのが最も実際の⁽³⁾」として、beat, boot などの核音を /i:/, /u:/ とするのである。つまり、音量を示差的特徴とみなし、音質は音量に自動的に付随する余剩的特徴と解釈するわけである。

これに対して、トレガー・スミスは beat などの核音についてはジョーンズとは反対の説をつぎのように述べている。

(1) 太田朗訳注、「英語構造の概要」1958. (G. L. Trager and H. L. Smith, *op. cit.*) p. v.

(2) 太田朗訳注, *Ibid.*, p. v. (J. Sledd の言 *Language* Vol. 31.)

(3) D. Jones, 1962. *op. cit.*, § 515.

Turning to the quality of the vocalic nuclei here, we find that there is an onset in raised lower high front position, [i[^]], with glide upward and forward, ending in high position, [i]; the symbolization [i[^]i] can be adopted, showing onset position and implied glide, with the final position designated by the symbol for non-syllabicity. In *seat* the movement and glide is very rapid and short, in *see* it is very marked. Nowhere do we find a completely static tense long vowel of the type cardinal [i].

つまり、beat などの核音の始めと終りでは調音位置が異なり、基本母音 [i] のタイプの完全に静的な、長いはり音 (Tense long vowel) はどこにも発見できない、というのである。このような見解から、トレガー・スミスは、ジョーンズが長母音 /i:/ と解釈しているものを、二重母音的であるとして /iy/ とするのである。

また、boot などの核音についても、トレガー・スミスは、boot booted boon loose lose do などの一連の核音を検討して、

The nucleus is kinetic in each case, beginning for much American speech at about [u[^]], and terminating at about [u]. The movement varies from short and slight in *boot* to very marked in *do*. None of these items ever has a static tense long vowel [u⁽²⁾].

と述べている。これも beat などの核音と同様に、二重母音的でない長母音 [u:] を有するものはないと考えて、ジョーンズが /u:/ とするものをトレガー・スミスは /uw/ と表記するわけである。

ジョーンズとトレガースミスがこのように相違するのは音韻分析の資料の相違もいくらかあると思われるが、解釈の相違によるものである。また、トレガー・スミスが調音的 (話し手の立場) に分析したのに対して、ジョーンズは聴覚的 (聞きての立場) に分析していることによって、このような違い

(1) Trager and Smith, *op. cit.*, 1. 21.

(2) *Ibid.*, 1. 22.

が生じたのであろう。

ジョーンズが bit と beat の母音核音を音量の相違による対立を認めて /i/, /i:/ としていることには筆者は反対である。それは beat の母音核音を調音的な立場からみると、舌が緊張して円くなっているため氣息の通路がせまく、しかも、口の開きが小さく、声門の開きも小さいし、声帯の緊張の度合が大きい母音であるのに対して、bit の核音は舌の緊張がなく平らで、氣息の通路が広く、口や声門の開きが大きいし、声帯の緊張も小さい母音であるからである。従って、筆者は bit, beat の母音核音は音質を示差的特徴とするものであり、この音質の相違は beat の音節副音の方に多く認められるので、beat の核音を複合と解釈するトレガー・スミスの考え方に賛成である。

ジョーンズは beat の核音を /i:/ と表わしているが、この核音を単一と考えているのか、複合と考えているのかは明言していないが、筆者はこれを複合と解釈する。それは、ジョーンズが母音の長さを示差的特徴としているところから、いわゆる長母音は短母音に長さの音素がついたもの、すなわち、/短母音+:(長さ音素)/ の複合音素と考えられるからである。このような観点から両者を比較すると beat, boot などの母音核音は、ジョーンズが量、トレガー・スミスは質を示差的特徴とする相違があり、複合と解釈する点は共通することになる。

1. 2. 2. つぎに、前記対照表の 3 と 4 であるが、ジョーンズは /a:/, /ɔ:/ と表記しているのに対して、トレガー・スミスは /ah/, /ɔh/ と表わしている。つまり、balm, caught などの核音を前記 beat, boot などの核音と同様に、ジョーンズは /V+:/ と解釈し、トレガー・スミスは /V+S (半母音)/ として、音節副音に /h/ を認めるわけである。この /h/ については批判が多く、キュラスは、

... give, bed, good, sun, etc. are disregarded in this "over-all" analysis of American English. If postvocalic [ə] is phonemicized as /h/

elsewhere, why not also here?⁽¹⁾

と反対の考えを述べている。つまり、/h/を認めるとしたら、give, bed, good などの音節核音はアメリカ英語では二重母音化するが、どうしてこれらも /gihv/ とか /behd/ のようにならないのか、というのである。そうして、キュラスはこの /h/ を摩擦音とみることを主張している。⁽²⁾ この /h/ を摩擦音とみることについて太田氏は、

/h/ が /w, y/ と異なる分布を示している点は認めねばならない。しかし、/h/ の示差的特徴が摩擦であるという意見は疑問であるといわねばならない。⁽³⁾

と述べている。

グリーソンは /h/ の他に /H/ を認めて、つぎのように述べている。

The fact that the /y/ and /w/ glides after vowels have counterparts before vowels naturally suggests that /H/ should also. The only possible candidate is /h/, as it is the only consonant which does not occur after vowels. There are certain tenuous similarities, but these are by no means as great as those found in /y/ and /w/. Since there is no clear evidence that /H/ has or has not a counterpart in /h/, linguists differ as to the direction in which the evidence points. I consider that keeping the two separate is the better solution, and hence use two symbols, /h/ and /H/.⁽⁴⁾

つまり、/H/ を母音のあとに、/h/ を母音の前に使うことをよい解決策だと考えている。しかし、その理由は述べていない。

この /h/ については、まだ多くの批判や考え方があるが、筆者自身これ

(1) H. Kurath, *The Binary Interpretation of English Vowels: A critique. Language*. Vol. 33. 1957. p. 115.

(2) *Ibid.*, p. 116.

(3) 太田 朗, 1959 *op. cit.*, p. 88.

(4) H. A. Gleason, *op. cit.*, p. 38.

を認めるか否かについては、確固たる理由を持って示すに到っていない、これからの研究課題の一つである。しかし、対象を一般アメリカ英語に限るならば、半母音の中に /h/ を認める必要はないと考えられる。それは一般アメリカ英語では cot と bought の母音核音の対立は /a/ と /ɔ/ で示され、トレガー・スミスのいう /ɔ/ と /ɔh/ の対立がみられないからである。

1. 3. 0. ジョーンズとケニヨン

ジョーンズはイギリス英語（南英方言）を対象とし、ケニヨンは一般アメリカ英語（米中西部方言）を扱っているという違いはあるが、表記についてはもちろん、解釈の上でも大きな相違がみられる。

1. 3. 1. 前記の表記対照表を一見して判ることは、ジョーンズが長母音で示しているもの全部 (/i:, a:, ɔ:, u:/) をケニヨンは単一の記号 (/i, a, ɔ, u/) で示していることである。このように単一の記号で示しているのは、ケニヨンは母音の長さ、ないしは二重母音的わたり音は重要でない、とすることによるもので、一般アメリカ英語の母音の長さについてはつぎのように述べている。

Only a few laws of vowel quantity are here given, since length of vowels, as also of consonants, is seldom distinctive in American English; there are few pairs of words that differ solely in length of the vowel. For example, the words *seat* **sit** and *sit* **sit** differ in quality of vowel, and if they differ in length, it is not distinctive.⁽¹⁾

この言は前述した音の長さが音韻的であるとするジョーンズの見解に対するものであるが、この相違はいわゆる長母音についての解釈の相違である。

ジョーンズがあくまでも母音の長さのみが音韻的であることに固執しているわけではなく、音の長さを示差的特徴と認めた理由については 1. 1. 1. と 1. 1. 2. で述べたが、太田氏は「全くの推測にすぎないと」と断って、

…… Jones が言うように単に伝統によっただけでなく、*caught*:*cot* のよ

(1) J. S. Kenyon, *op. cit.*, p. 62.

うに、より明らかにイギリスにおいて長さの対立、アメリカにおいて質の対立としてとらえられるものがあって、それが無意識のうちに圧力を加えたのではないか、つまり同型性の原理が働いたのではないか、¹⁾と思う。と述べている。

ジョーンズについての筆者の考えは前記 1. 2. 1. で述べたので、ここではケニヨンについて考察する。ケニヨンがいわゆる長母音について単一の記号を用いているのは量より質を重要視したためであって、短母音と長母音の間に全然音量の差がないというのではなく、音声学的には音量の差はあっても、音韻論的にはその差を認める必要がない、として単一の記号を用いているように考えられる。また、音素分析の際は、一語一語切って、ゆっくり発音した場合のスタイルを対象とするか、ノーマルなスピードの会話体を対象するかによって、取り扱いが異なってくると思われるが、ケニヨンはノーマルなスピードの会話体を扱い、しかも教育的考慮を介入して上記のような解釈をし、単一の記号で表記したものと思われる。従って、トレガー・スミスのように、いわゆる長母音を二重母音的であるとするところまでは、いたらなかったのであろう。

1. 4. パイク

小論が扱う範囲では、長母に関してはパイクの表記法とケニヨンの表記法は同じであるので、考察を省略する。ただ、母音全体の表記を比較した場合、ケニヨンは若干の異音表記をしているが、それを音韻論的にすっきりした形に整理したのがパイクであるといえる。

1. 5. 0. 太田氏とトレガー・スミス

太田氏はトレガー・スミスの /h/ を半母音の中に認めていない。その代りトレガー・スミスにはない /r/ を半母音としている。つまり、単純核音を /i, e, æ, a, u, ə, ɔ/ と七つ認め、これらの後に半母音 /w, y, r/ がついたものを複合核音としている。

(1) 太田 朗, 1959. *op. cit.*, pp. 217~218.

1. 5. 1. beat, boot などの核音については、太田氏はトレガー・スミスと同様に /iy/, /uw/ としている。しかし、palm, caught の核音については、トレガー・スミスの複合と解釈するのに対して、太田氏は単一とし、しかも半母音 /h/ を認めず、/a/, /ɔ/ としている。/h/ を認めない理由については、

……個人語では bomb:balm で /a/: /ah/ が対立し、can (助動詞): can (缶) で /æ/: /æh/ が対立するという。しかし、/ɔ/: /ɔh/, /e/: /eh/, /ə/: /əh/ の対立は与えていない。筆者の観察では、中西部地方の話者には、/Vh/: /V/ の対立はないように思われる。⁽¹⁾

と述べている。トレガー・スミスが総合型であるのに対して、太田氏は一般アメリカ英語を対象としているところから上記のような差がみられるとも考えられるが、太田氏「たとえ総合型でも、Trager-Smith のように /æw/: /aw/, /ɔw/: /ow/, /oy/: /oy/ などの対立を /iy!/: /i/, /ey!/: /e/ などの対立と同列に取り扱うのは賛成できない」と反対の意見を述べている。⁽²⁾

筆者が太田氏の解釈について異論をはさむ余地は今のところない。それは筆者の長母音についての解釈は 1. 2. 1. で述べた如く、また、対象を一般アメリカ英語に限った場合の caught などの核音についても 1. 2. 2. で述べたように、ほぼ太田氏の考え方に同じだからである。

1. 6. 以上、各学者のいわゆる長母音についての解釈と表記法を検討してきたが、各学者間の長母音に対する解釈が大きく三つに分かれる。まず長母音を複合とする(トレガー・スミス、太田氏)⁽³⁾。つぎが単純とする(ケニヨン、パイク)。最後が母音の長さを認める(ジョーンズ)。このような解釈の相違によって表記法も異なってくるわけである。

(1) 太田 朗, 1959. *op. cit.*, pp. 100~101.

(2) *Ibid.*, p. 91.

(3) 太田氏は一部を単一とする。 *cf.* 1. 5. 1.

2. 二重母音

2. 0. いわゆる二重母音について各学者の説を検討する前に、二重母音の性格を考察する。一般に、同一音節中にある連続した二個の母音を二重母音という。単母音が終始音質に変化がなく、調音の位置に移動がない静母音 (Static vowel) であるのに反して、二重母音は、調音の位置が移動する動母音 (Dynamic vowel) であり、わたり母音 (Glide vowel) である。二重母音には三種類ある。(1) 下向二重母音 (Descending or falling diphthong). これが最も普通なもので音節主音が先行し、音節副音がこれに続く。(2) 上向二重母音 (Ascending or rising diphthong). 副音が先立ち主音がこれにつづくもの。(3) 水平二重母音 (Level diphthong). これは二つの母音の間に主副の区別の認めがたいもの。

上記三種の区別は音声学的なものであるが、これから検討する二重母音については、これらの区別を考慮せずに、長母音の場合と同様に音韻論的な立場で考察する。

2. 1. ジョーンズとケニヨン

対象としている音声的データが米音と英音の違いによっても考えられるが、二重母音の表記で最も大きな相違がみられるのは、ジョーンズとケニヨンである。

ジョーンズが二重母音としているものの中で *bait*, *boat* などの核音をケニヨンは /e/, /o/ とし、単一と解釈している。しかしながら、ジョーンズが /ai/, /au/, /oi/ としているものは、使用している記号の違いはあるが、ケニヨンも /aɪ/, /aʊ/, /ɔɪ/ としている。

bait, *boat* などの核音を /e/, /o/ とする理由についてケニヨンは、

The phoneme principle warrants the use of the symbols *i* and *u*, and *e* and *o* in words like *beet*, *boot*, *made*, *mode*; for although these sounds are often diphthongal *li*, *uu*, *ei*, *ou*, yet in no case are

the simple vowel and the diphthong mutually distinctive. No English word containing *i*, *u*, *e*, or *o* would be a different word if *ii*, *uu*, *ei*, or *ou* were substituted. ... even though these vowels are often diphthongal both in America and England. They are often not so in America, and sometimes not even in standard British.

と述べている。この言について太田氏は、

たしかにイギリス英語にくらべればアメリカ英語では、これらを単母音にすることが多いようであるが、しかし完全な単母音でなく、多少なりとも二重母音的性質があることは否め⁽²⁾ないと思う。

と述べている。筆者にも米音の方が英音よりも二重母音化の傾向は少ないように思われる。しかし、完全な単母音ではなく、やはり、二重母音が認められる。前記 1. 3. 1. で述べたように、ケニオンは音声学的には二重母音的性質はあっても、音韻論的にはそれを認める必要がないと解釈したのであろう。しかしながら、*bait*, *boat* などの核音のみを単一とし、*bite*, *bout*, *boil* の核音を複合とするのは理解できない。

2. 2. トレガー・スミスとジョーンズ

両者を表記によって比較した場合、二重母音を複合単位とする点は共通であるが、ジョーンズが二重母音を /VV/ としているのに対して、トレガー・スミスは音節副音を半母音と解釈して /VS/ としている点で相違する。トレガー・スミスが複合母音核音の音節副音を半母音とする理由については、複合母音核音を有する一連の語を分析した後、音節の単純母音以外の核音は九つの母音の一つではじまり、三種類のでわたり音 (Offglide) で終る複合核音であることが判った、と述べてつぎのようにいう。

There is thus phonetic similarity, the allophones of /y w h/ being onglide mirror-images of the offglides /F B C/. In addition,

(1) J. S. Kenyon, *op. cit.*, pp. 69~70.

(2) 太田 朗, 1959. *op. cit.*, p. 77.

/y w h/ are in complementary distribution with /F B C/. Finally, the two sets show exact pattern congruity in all their allophones—highest position before or after /i i u/, lowest before or after /æ a ɔ/, intermediate before or after /e ə o/. There is thus no doubt that the only possible PHONEMIC analysis is to put /F B C/ into the phonemes /y w h/ respectively.

The complex nuclei are then to be analyzed as /V S/, where /S/ is to be read “semivowel,” defined as one of the three phonemes /y w h/. The term “semivowel” is, of course, only a label for a class of consonants with certain features in common. In their behavior in initial clusters with other consonants, /y w h/ show no particular symmetry, a fact easily accounted for historically.⁽¹⁾

これに対してジョーンズは、

By a vowel-glide we mean that the speech-organs start in the position of one vowel and move in the direction of another vowel.⁽²⁾

と述べている。つまり、トレガー・スミスのいう半母音は、或種の特徴を共有する子音の一種であるのに対して、ジョーンズは音節副音を母音と解釈しているわけである。このジョーンズの考え方には賛成しかねる。筆者は二重母音を /V+S/ の2個の音素連結からなる複合単位と解釈する。従ってトレガー・スミスに賛成である。それは、音節副音が前記1.2.1.の長母音における音節副音について述べたように、単純母音とは異なる性質を認めるからである。つまり、二重母音における先行の母音と副音とは、はっきりした違いがあるからであり、二重母音の副音は長母音における副音と同じ性質を持つと考えるからである。

2. 3. 太田氏はトレガー・スミスと殆んど同じであるが、ただ異なる点は boat の核音を太田氏は /ɔw/ とし、トレガー・スミスは /ow/ とする

(1) G. L. Trager and H. L. Smith, *op. cit.*, 1. 32.

(2) D. Jones, 1960. *op. cit.*, § 219.

点である。これは前述したように太田氏が一般アメリカ英語を対象としているのに対して、トレガー・スミスは全ての方言を対象とする総合型であるために、単純母音を太田氏は七つ、トレガー・スミスは九つ認めたことによる。

2. 4. パイクは使用する記号が相違するだけで、二重母音に関してはケニヨンと似ているので省略する。

2. 5. いわゆる二重母音についての各説を検討してきたが長母音程の大きな相違はみられない。つまり、二重母音を複合単位とするのが大部分で、ただ一部分を単一とする学者がおり、音節副音を母音とするか半母音とするかの相違がみられるだけである。これらの相違も、長母音の場合と同様、いくらか扱う音声的データの違いも考えられるが、音韻解釈の相違によるものであろう。

3. 音素表記の記号

一音素一記号が音素表記の理想とされている。一音素一記号というのは、いろいろな問題を含んでいると思われる。音素記号に主としてアルファベットを用いているのは、記憶や印刷に便利とか約束などの便宜的なものであり、どうしてもアルファベットを使用しなければならない、という原則はない。より便利な記号が発見されれば、それに代ってもよいわけである。従って、使用している記号のみを云々することはナンセンスである。要は各人が音素をどのように解釈し、その音素をどのように表記するかが問題なのである。

たとえば、前記トレガー・スミスは beat などの核音を /iy/ と表記し、しかも /iy/ が複合であることを明言しているが、解釈と表記が必ずしも一致しない場合がある。ホケットは bay の音節核音について /bej/ という表記を使っているが、その解釈の仕方を次のように述べている。「bay の母音を二つの音素の連続と解釈したい者は、/ej/ という表記を二つの音素の

連続と解釈してよい。また bay の母音を一つの音素と解釈したい者は、/ej/ という表記を単一の要素の代わりに用いられている複合記号と解釈してよい。これは科学者達が hydrogen (水素) に H を用いているのに対して helium (希ガス類元素) に He という記号を用いているのと同様に考えてよい。⁽¹⁾ しかし、筆者は、もし、単一と考えるならば単一記号を用いるべきであると思うが、一音素一記号という原則が、原則として認められながらも、実際は守られていないのが現状であろう。

以上、便宜的にいわゆる長母音、二重母音に分けて、英語複合母音核音についての解釈と表記の問題点を、特に諸学者間で相違のはなはだしい点を重点的に考察し、検討してきたが、筆者自身の批判や意見を多く述べなかった。それは、すでに多くの学者が各説について、種々の批判をしており、さらに浅学非才の筆者が屋上屋を重ねることは無理であり、望むべきもないからである。そこで、諸学者の批判や説を考察したうえにたって、総合的に、巨視的な観点で私見を述べる冒険を試みる。

扱う音声的データの違いによる解釈や表記法の相違は当然であるが、同じデータに対しての相違の最も大きな原因は、音素論が今だに完成の段階にいたっていないことによるものと思われる。それは、音素論が調音的、聴覚的、音響的な立場から平等に考察されるのが理想であるのに、実際は、調音的な立場から接近されてきたことによる。つまり、調音音声学が最も開発されており、つぎが音響音声学、一番遅れているのが聴覚生理学である。従って、極言すると、各学者が調音的な立場を主とし、音響的な立場、聴覚的な立場を従として、さらに教育的考慮の介入などによって各自の解釈がなりたっていると考えられる。そうして、聴覚的、音響的、教育的なものが、どれだけ調音的なものに介入したか、その度合によって解釈の相違ができてく

(1) C. F. Hockett, *A Course in Modern Linguistics*. 1958. p. 32.

(2) 単なる聴覚印象ではなく、聴覚生理の客観的資料にもとづいたもの。

るのではなからうか。もう一つ、音素分析の際に、一語一語切って、ゆっくり発音する場合のスタイルを対象として扱うか、ノーマルなスピードの会話体を対象とするかによっても異なってくるものと思われる。

トレガー・スミスは総合型という前提のもとに、調音的な立場を主とし、聴覚的な立場を従として、あらゆる英語の方言を対象に音韻分析を行なったが、表記法をすっきりさせようとするあまり、無理が生じ、批判が多いのであろう。トレガー・スミスの掲げる音素表記のうち、真に音韻的対立をするものがいくつあるかは疑問である。英語のすべての方言の体系をおおう総合型の設定は現在の音素論では不可能であると、いわざるを得ない。ジョーンズは前記太田氏の言のように、同型性の原理が無意識のうちに働いたのと、あまり伝統にとらわれすぎたきらいがある。ケニヨンとパイクは前述の如く、ノーマルなスピードの会話体を対象とし、長母音や二重母音の一部分を単一としたのは聴覚印象と教育的考慮を重要視しすぎたものによると考えられる。

音素論の現段階では、各人各様の解釈と表記がなされるのは致し方ないが、同一のデータに対しては解釈も同じになるような音素論の確立が急務であらう。

最後に、今まで検討してきた中で誰の表記が最良であるか、という問題であるが、小論の範囲では、つまり、複合母音核音のみを検討しただけでは解答が得られない。さらに、母音、子音の全てについて、可能な限りのあらゆる解釈と表記の一つ一つの長短を綿密に比較考究しなければならない。しかし、前記対照表の範囲内で、しかも、対象を一般アメリカ英語に限った場合、誰のを最良とするかと問われたら、太田氏のものにする。つまり、単純母音核音を七つ認め、これらのあとに /w y r/ のついた核音を複合核音とする解釈と表記である。その理由は、すでに 1.2.1. と 2.2. で述べたことによる。